

# 映画は戦争をどう伝えたか

# 日中研究者対話で探る



日中の戦争映画の研究手法について語り合う京都大の田中雅一教授(左)と関西学院大のティモシー・ツイ教授(京都市左京区・京都大)

日本と中国の映画が日中戦争をそれぞれどう描いてきたかを探ろうと、京都大人文学研究所の研究者らが中心になって定期的に議論する国際ワークショップを始めた。これまであまり比較研究の対象とされてこなかった両国の戦争映画をテーマに、学术交流を深めるのが目的。「欧米の研究者にも参加を呼びかけ、人文学の視点から議論を深めたい」としている。

日中両国の歴史認識の違いから、近現代の戦争を描いた映画はそれぞれ国内上映に限られがちだ。学術の世界でも縦割りや細分化の傾向があり、日中の研究者の対話は少ない。そこで、人文研の田中雅一教授と関西学院大のティモシー・ツイ教授(香港出身)が「定期的に集まる機会を設けたい」と、国際ワークショップを企画した。7月に京大で開いた第1回国際ワークショップには、映画史や社会人類学などを専門とする11人が集まった。中国のほかオーストラリアやイタリヤからも

## 京大など企画 将来は全アジアで

研究者が来日。1950〜60年代の日本では戦争映画ブームが起り、今と違って戦争を美化する作品が多かったことや、最近の中国映画には日本兵に同情的な描写が見られることなどを、互いに英語で報告し合った。

ツイ教授は「日中の研究者は相手国の戦争観が変化していることを認識すべきだ。和解につながるかどうかは別として、まずは議論と相互理解を深めることが大事」と、国際ワークショップに期待する。

来春に香港で2回目のワークショップを開く予定で、田中教授は「韓国の研究者にも参加してもらい、将来的にアジア全体の戦争映画研究に広げたい」としている。(芦田恭彦)